



## バックナンバー 4 : Vol.031 ~ Vol.040

- ① Vol. 031 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員ハナ・ベイリーさんの場合
- ② Vol. 032 そうだ海外研究調査へ行こう — 松田睦彦准教授の場合
- ③ Vol. 033 人間文化研究機構日本研究国際賞に期待する
- ④ Vol. 034 ひな祭りについて知っておきたい5つのこと
- ⑤ Vol. 035 地域と都市が創る新しい食文化
- ⑥ Vol. 036 そうだ海外研究調査へ行こう — 相島葉月准教授の場合
- ⑦ Vol. 037 情報学から読み解く日本古典文学：はじまりは『源氏物語』
- ⑧ Vol. 038 暮らしの映像から考える持続可能な未来
- ⑨ Vol. 039 そうだ人文機構、行こう — 外来研究員クラウディア・デッラカーサさんの場合
- ⑩ Vol. 040 越境するマンガ — 大英博物館のマンガ展を契機に振り返る



ー 外来研究員ハナ・ベイリーさんの場合

人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、2014年度に京都の国際日本文化研究センター（日文研）で受け入れたハナ・ベイリーさんに、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。ハナさんは現在、英国のキール大学に在籍して、現在、音楽・映画研究の博士論文を執筆しています。

**現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？**

私は、映画音楽や音響、日本のホラー映画、日本文化、アダプテーション論、流用論、映画のリメイクといったテーマに関心があります。博士論文をまとめているところで、日本のホラー映画、俗に「心霊もの」と呼ばれる映画について音楽や音響の役割を新たに概念化しようとしています。また、日本のホラー映画が世界の他の地域のホラー映画、特に日本映画をアメリカでリメイクした作品とどのように異なるのかも検討しています。

**この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？**

英国の大学で音楽と英文学を専攻していました。最終学年のときに「シェイクスピア作品の映画化」に関するモジュールを受講し、シェイクスピアの悲劇が日本で映画化されていることを知りました。卒業論文では、各国でリメイクされたシェイクスピア映画の音楽について考察し、黒澤明の「蜘蛛巣城」（英題は“Throne of Blood”、『マクベス』翻案）の音楽を担当した佐藤勝、「乱」（英題は“Ran”、『リア王』翻案）の音楽を担当した武満徹の楽譜なども取り上げました。

その後、関心は現代に近い時代の日本の映画音楽に移り、修士論文では日本版「リング」と米国リメイク版「ザ・リング」の映画音楽と音響効果を比較しました。日本のホラー映画の視覚表現については、すでに多くの研究がありますので、私の関心は、こうした映画の音楽・音響表現を分析することや、心霊表現の文化的な差異が音楽や音響によっていかに増幅されるかにありました。こういった経緯が私の博士論文のきっかけとなっています。

**5年後、そして10年後、あなたは何をしていると思いますか？**

高等教育機関で学生に教えていたいと思います。再びフェローシップの機会を得て、今温めているプロジェクトや、日文研へのフェローシップをきっかけに生まれたアイデアを実現できていたらうれしいです。そして、現代日本映画音楽の研究者仲間と共同で本を出版したいですね。

**外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？**

日文研の職員の方々や指導教官の細川周平教授、通訳を手配してくれた京都大学の研究者仲間の力添えで、日本の映画音楽・ゲーム音楽界を代表する3人の作曲家 - 冷水ひとみ、川井憲次、ゲイリー芦屋 - にインタビューすることができました。作曲過程や他の業界の仲間とのコラボレーションについて大変興味深いお話を伺うことができました。



**海外や異文化での研究を考えている学生・若手研究者にアドバイスをお願いします。**

言葉の問題を理由に、応募をあきらめないでください。スタッフや同僚が必ずサポートしてくれます。私の場合は、さまざまな研究の機会を通じて、実用的な日本語を覚えていきました。キール大学で授与された日本語能の資格を持っていたことも役に立ったと思いますが、学生・若手研究者は、希望している派遣先の研究機関がどのような言語サポートを提供しているか、事前に問い合わせると良いでしょう。

派遣先では研究日誌をつけることをお勧めします。私はスーツケースいっぱいの資料を持って英国に戻りました。たくさんあってダンボール数箱分を郵送したほどです！帰国後、資料の分類には時間がかかりました。ですが、日本の芸術で用いられている心霊表現や恐怖表現を本場で触れることによって、日本映画では音楽・音響表現がどのように形作られたのか、という点について私自身が理解を深められたことを反芻する作業でもありました。

#### ハナ・ベイリーさん

ハナ・ベイリーさんは英国キール大学に在籍して、ニコラス・レイランド教授、ニール・アーチャー博士、アラスデア・ウィリアムズ教授の指導のもとで、音楽・映画研究の博士論文を執筆しています。ベイリーさんの研究は英国芸術・人文リサーチカウンシル (AHRC) の助成を受けています。2014年10月、ベイリーさんはAHRCのフェローシップで、京都の国際日本文化研究センター（人文機構を構成する6つの機関のひとつ）に5カ月間派遣されました。ベイリーさんの論文“Sound and Techno-Horror: Kairo and Pulse”（音とテクノホラー：「回路」と「パルス」）は、現在査読中です。

ベイリーさんの趣味は、茶道（茶の湯、茶湯、文字通りには「湯を沸かし、茶を点てること」）です。日本でお茶会に参加したことがきっかけで興味を持ちました。その他の趣味は、映画鑑賞とピアノを教えることです。

Twitter: [@bayleyhn](https://twitter.com/bayleyhn)



## Vol. 032 そうだ海外調査へ行こう — 松田睦彦准教授の場合

人間文化研究機構では、国際連携の推進や国際的視野を備えた研究者養成を目的に、基幹研究プロジェクトに参画する若手研究者を海外の研究機関に派遣する「若手研究者海外派遣プログラム」を実施しています。

今回は、韓国に派遣された国立歴史民俗博物館（歴博）の松田睦彦准教授に、ご自身の研究活動や海外調査研究での印象的な出来事など、お話を伺いました。

### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

現在、歴博が国際交流協定を結んでいる韓国国立民俗博物館との共催でおこなう企画展示、「海がつなぐ日本と韓国（仮）」の準備を進めています。この企画展示は、歴博の共同研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」（2015～2017年度）の成果をもとに開催するものです。

列島を形成する日本と、半島を形成する韓国。双方の文化は、それぞれの独自性を持っていますが、さまざまな共通点も見いだすことができます。この共同研究では、日韓の海をめぐる文化の相違と類似を顕在化させるとともに、その背景を明らかにすることを、日韓の研究者とともに試みました。

日韓の各地を歩いて感じ、互いに議論して考えた成果を、広く一般の皆さまと共有したいと思っています。企画展示「海がつなぐ日本と韓国（仮）」は2019年10月～2020年2月に韓国ソウルの国立民俗博物館で、2020年3月～5月に歴博で開催される予定です。

### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

歴博は10年にわたって韓国国立民俗博物館との交流事業を進めてきましたが、2015年からの5年間の事業を私が担当することになりました。この5年間では、日韓共同で企画展示を開催することがゴールとなり、展示のテーマは「日韓の海的生活文化の比較」と決まりました。そこで、その準備のために、共同研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」を立ちあげました。

私はもともと韓国の研究をしていたわけではありませんが、韓国の漁業の現場や海産物利用の調査を進めると、日本との類



似が多いことに気がつきました。この類似の背景には、もちろん、東アジアという文化的基盤の共有や、自然環境の類似が想定されますが、戦前における日本の漁民の、朝鮮半島への進出という歴史も重要です。漁民の移動に関心を持っていた私としては、現在の日韓の海をめぐる文化の類似を、近代の日本人漁民の朝鮮海出漁という観点から分析してみようと考えました。

### 今回、若手研究者海外派遣プログラムを利用して韓国に渡航した目的は何でしたか？

今回の渡航は、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」からの派遣という形で実現しました。このプロジェクトは、「地域社会に存在する多様な歴史的・文化的資源を次世代に伝えるために、必要とされる拠点のあり方とその維持の条件を明確化し、具体的な提言を行なうこと」を目的としていますが、私はそのなかで「東アジアを中心とした歴史文化資源の保存継承に関する比較研究」をおこなうことを課題としました。

具体的には、ソウル大学校社会科学大学比較文化研究所を拠点として、海と関係する技術や信仰、儀礼などの歴史的・文化的資源を対象に、韓国各地におけるそうした資源の現状と、各地域の博物館や行政機関などによる保存継承への取り組みについて調査をおこなう計画をたてました。

### 韓国に滞在して、最も記憶に残ったできごとは何でしたか？

忠清南道泰安郡安眠邑の黄島でおこなった旧正月の祭りの調査が印象的でした。祭りは、村の祠堂で、村が招いたムーダン（宗教者）の一行によってとりおこなわれます。ムーダンたちは神に祈りを捧げたり、神をみずからにおろして歌をうたったりしながら、一年の安寧と豊漁を祈ります。祭りは昼夜にわたって続きます。極寒のなか、供犠の牛をさばいて作ったスープや、村人の手で醸されたどぶろくで体を温めながら、ムーダンたちと一緒に踊るといった経験は、とても新鮮でした。

また、小正月には全羅南道莞島郡の莞島の祭りをみました。地元の人びとが鉦や太鼓をかき鳴らしながら各家々をまわります。ここではおばあさんたちがとても元気で、お酒を飲んで陽気に踊っていました。日本の祭りでは、女性が裏方に徹することが多いのですが、莞島では、この日ばかりは女性も解放されるようです。日本人だと言うと、酔ったおばあさんにほっぺたにキスをされたのが良い思い出です。

### 外国でこれから調査研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。

私の専門は韓国の研究ではなく、あくまでも日本の民俗の研究です。それでも、韓国ですごした4か月半は、私の研究にとって、とても重要な経験でした。その理由は、韓国を実地で調査研究することが、日本を調査する私の目を豊かにしてくれたからです。たとえば、日本だけを見ていたのでは、ある事象が日本特有のものなのか、それとも、より普遍性を持つものなのか判断できません。韓国での滞在を終えてから、日本での調査でさまざまな事象をみる際に、韓国でみた、似たような事象を思い出すことや、現象としては似ているのにそこにこめられた意味がまったく違うことに驚くことがたびたびあります。

民俗学にかぎらず、他の分野においても、比較の素材が多いほど研究の幅は広がるはずですが、今取り組んでいる研究に、すぐに、直接的な成果をもたらす調査のためだけではなく、みずからの研究の幅を広げ、奥行きをもたせるためにも、積極的な海外渡航をおすすめします。

#### 国立歴史民俗博物館 松田睦彦准教授

早稲田大学第一文学部で近代文学を専攻したのち、民俗学を学ぶために成城大学大学院へ進学。博士（文学）。単著に『人の移動の民俗学—タビ〈旅〉から見る生業と故郷』（慶友社 2010年）、共編著に『柳田國男と考古学—なぜ柳田は考古資料を収集したのか』（新泉社 2016年）などがある。





## Vol. 033 人間文化研究機構日本研究国際賞に期待する

日本経済の停滞状況に応じて、海外における日本研究の存在感が、かつてに比べて、また上手に自国研究を発信している国々に比して、次第に下降気味であるという話を聞くことがあります。国際的に日本研究や日本文化に広く関心をもっていただき、その研究者が増加して活躍していただくことが、日本研究の内外におよぶ学術的な発展のためにも、必要なのではないのでしょうか。そうした中で、海外で日本研究を高いレベルで学術的に進め広めておられる研究者を顕彰することは、日本研究の国際化や国際的な日本文化理解の促進のために、大きな意義をもちます。

そこで、この度2019年1月、人間文化研究機構（「機構」）では、日本研究の国際的発展と日本文化の理解を深め広めることをめざして、一般財団法人クラレ財団の協力を得て、「人間文化研究機構日本研究国際賞」（NIHU International Prize in Japanese Studies）を新たに創設しました。この賞は、海外を拠点として、日本に関する文学、言語、歴史、民俗、民族、環境などの人間文化研究において学術上とくに優れた成果を上げ、日本研究の国際的発展に多大な貢献をした研究者を、受賞の対象としています。

受賞者に対しては、招へいして東京で授賞式を行い、賞状、記念品及び賞金2万ドルを差し上げるとともに、記念講演会を開いて研究成果を多くの人々にお話していただきます。

受賞者の選考にあたっては、機構内外の委員からなる選考委員会を置いて、推薦にあたっては、人文研究に関連する国内の大学・大学共同利用機関や学協会から推薦を頂くだけでなく、機構などと協定を結んでいる海外の諸機関からも推薦を受けることにしています。

この人間文化研究機構日本研究国際賞が、実績をもつ優れた日本研究者の業績に報いて、その国際的評価を高めることとなれば、日本研究への注目を高め、ひいては日本文化の価値を正確に知っていただくことにつながるでしょう。また、これから日本研究を志したいという若い研究者たちにも、大きな励みとなることでしょう。

今年の秋には、厳密な選考を経て、晴れの第一回人間文化研究機構日本研究国際賞の受賞者が決まることとなります。この賞を通して、日本研究の可能性が国際的にさらに広がり、日本研究が深化・発展していくことを期待しています。

文責：人間文化研究機構理事 佐藤 信



CC BY-NC 2.0 cherry Blossom



## Vol. 034 ひな祭りについて知っておきたい5つのこと

3月3日はひな祭りです。女の子の成長を祈る、もしくはお祝いするひな祭り。このようなひな祭りは、実は江戸時代から続く行事で、もともと上層階級の女性の遊びだったとのこと。女の子のいる一般家庭でひろくおひな様が飾られるようになったのは、戦後の風習であることをご存知でしたか。

戦後に全国各地に広まったひな祭りとおひな人形。今では、地域興しのための観光資源としても注目されているそうです。ひな祭りの成り立ちや歴史、時代ごとの変遷について、[国立歴史民俗博物館（歴博）](#)の山田慎也准教授にお話を伺いました。



### ひな祭りの起源について教えてください。

ひな祭りの起源は諸説ありますが、大きくわけて二つあるといえるでしょう。ひとつは、忌まわしい、不浄な状態やものをはらい、すすぎ落として、きれいな状態にする行為が起源だという説があります。人形に息を吹きかけて、穢れ（けがれ）を流すという禊祓（みそぎはらえ）という古代からの慣習です。

もうひとつは、「ひいなあそび」という小さな人形を使って行われるおままごとを起源とする考えです。ちなみに「ひいな」とは「小さな人形」という意味です。紙でできた立ちびなを壁に立てかけて飾り、そのひなにお供えをする。そういった遊びが子どもからやがて女性にもひろがり、徐々に遊びよりも装飾性の色合いが強くなった、という説です。

今のように3月3日にひな人形を飾ってお祝いするようになったのは、江戸時代の後期です。

### 江戸時代に生きた女性は、ひな人形をみな飾っていたのでしょうか。

いいえ。もともと、ひな祭りは上層階級の女性の遊びでした。ですから、江戸時代には、おもに身分の高い女性の間で行われていたものと考えられています。これは、明治・大正に入って次第に広がっていきます。サラリーマンを中心とした新しい都市の中間層が生まれ、子どもにお金をかけるようになり、家庭で女の子のためにひな人形が買われるようになるのです。加えて、特定の時期や店舗からしか購入できなかったひなかざりが、百貨店でも販売されるようになります。また土雛や雛を描いた掛軸などもひな人形の代わりに使われました。そして、戦後になると国民全体が経済的に豊かになって、それまでひな人形を飾る習慣のなかった地域にまで広まり、ひな人形も大量生産されるようになります。

### ひな祭りが全国的に広がった後は、どうなったのでしょうか。

もともと家が狭くて飾るスペースが限られていたり、女の子が成長してしまったりするとひなかざりを飾らなくなる家庭が出てきました。そこで、現れたのが節句イベントです。

たとえば、徳島県勝浦町の「[ビッグひな祭り](#)」（2019年2月18日～4月8日）。不要になったおひなさまを階段状に四方に25段ずつ、計100段、高さ8mのピラミッド状に飾ります。1980年代から始まったこのイベントは、現在、全国各地で見られる節句イベントのはしりで、周辺の地域からビッグひな祭りを見るために観光目的で訪れる人もいます。つまり、役目を終えたひな人形が、観光資源として利用されるようになってきたのです。

### その他にはどんな節句イベントがあるのでしょうか。



千葉県勝浦市では、「かつうらビッグひな祭り」(2019年2月22日～3月3日)が開催されています。これは、先ほどご紹介した徳島県勝浦町のお祭りを地名が同じ勝浦市でも始めたものです。約30,000のひな人形を神社の石段をはじめとして、市内の各所に飾ります。都心からのアクセスもよいことが重なって、今では20万人もの人が訪れるひとつの観光産業になっていますね。ほかにも和歌山市加太の淡嶋神社では、ひな人形を船に乗せて海に流す「ひな流し」というイベントもあるんです。

**歴博でも珍しいひなかざりが見られるようですが、どのようなものでしょうか。**

歴博では仁孝天皇(にんこうてんのう)の8番目の女の子として生まれた皇女和宮が所有していたひな人形や付属の道具類を所蔵しており、二年に一度、館内で展示しています。残念ながら、今年は展示のない年です。

和宮ゆかりのひな人形は、男雛、女雛のセットで、有職雛と呼ばれる種類のものです。京都で流行したそうです。朝廷に仕える公家のうち、職位の最も高い公卿(くぎょう)が身につける衣装を精巧に復元した装束をまとっています。ひな人形のほか、約80点もの道具があり、この道具立がひとつの見所です。

たとえば、道具の中には囲碁があるのですが、碁石もあって。碁石はごま粒ほどの大きさで、1mm四方もないんです。将棋の駒も同様です。そういったひとつひとつの道具の繊細で凝った作りを眺めるのもおすすめです。



江戸時代には、高貴な女性や子どもの間で行われていたひな祭り。戦後には、誰もがひな人形を飾ってお祝いするお祭りになり、今では観光資源としての側面も見られます。昔から数千年も変わらずに続いているようなお祭りだという錯覚に陥りがちですが、ひな祭りの歴史を紐解くと比較的新しく、また時代や社会の変化の影響を受けて変遷している様子がわかります。

聞き手：高祖歩美



和宮所用品として国立歴史民俗博物館に所蔵されているひな人形(国立歴史民俗博物館所蔵、江戸時代 H-40)



手拭（てぬぐい）掛・鏡立・櫛台・盥（たらい）・鼻紙台・角盥（つのだらい）・嗽椀（うがいわん）・鉄漿（かね）道具  
（国立歴史民俗博物館所蔵、江戸時代 H-40）

関連リンク：[歴史の証人 - 写真による収藏品紹介（歴史系総合誌「歴博」第128号）](#)



[国立歴史民俗博物館准教授 山田慎也](#)

専門は民俗学、文化人類学、とくに葬儀の変容と死生観、年中行事と観光などに関心を持つ。慶應義塾大学法学部、同大学大学院社会学研究科博士課程満期退学。社会学博士。国立民族学博物館講師、国立歴史民俗博物館民俗研究部助手を経て現職に至る。





## Vol. 035 地域と都市が創る新しい食文化



和食がユネスコ無形文化遺産に登録され5年が経ちました。海外における日本食レストランも約12万店にのぼり10年前の2倍に増えています。日本を訪れる外国人数も2018年は3000万人を超え、5年前の3倍となるなか、観光地でしたいことの第3位には郷土料理がはいるなど、海外からの日本の食文化への視線は地方にまで及んでいます。

日本国内でも、2014年に山形県鶴岡市は日本唯一のユネスコ食文化創造都市として認定され、地域固有の食材や食文化が再認識されるとともに、都市との連携による食文化産業を振興させ、地域経済や文化の発展につなげようという取り組みが始まっています。

人間文化研究機構は2018年12月4日、公益財団法人味の素の文化センターと共催で、シンポジウム「地域と都市が創る新しい食文化」を味の素グループ高輪研修センター（東京都港区）にて開催し、生産者、消費者、研究者そして行政が一体となって、地域の食材や食文化といった資源を未来に残していくための方策について考えました。

はじめに、鶴岡市のイタリア料理店「アル・ケッチャーノ」オーナーシェフの奥田政行氏より「食を通じた人づくり地域づくり」と題して、食を通じて地域を元気にしていく取り組みについて、ご自身の経験をもとにした講演がありました。続いて、石川智士東海大学教授より「食」が育む地域の可能性ーエリアケイパビリティアプローチから見た食の重要性ー」と題して、研究者、行政、漁業者が協働した持続可能な海洋資源利用や地域活性化の在り方についての講演がありました。

トークセッションでは、冒頭で田村典江総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員より北米のフード・ポリシー・カウンシル（※）について紹介がありました。その後、ハイン・マレー総合地球環境学研究所副所長の進行により、食資源を未来にわたって利活用していくためには、自分の地域をよく知り、自信を持つこと、そして地域資源の保護活動が外部から評価されることによって自身の活動にプライドを持つことが重要であること、従来の生産と消費を分離した都市型のフードシステムを見直し、消費者もシステムの中に取り込んだ新しいフードシステムを作っていくことで、持続可能な食を提供できる社会システムを作っていくことが求められていることなど、多角的な視点から意見が出されました。

※地域のフードシステムの問題を解決することを通じて、町づくりや環境といった都市の課題に行政、市民、事業者が総合的に取り組む組織。

文責：人間文化研究機構特任助教 菊池百合子



奥田氏による講演



石川教授による講演



会場の様子



## Vol. 036 そうだ海外研究調査へ行こう — 相島葉月准教授の場合

人間文化研究機構では、国際連携の推進や国際的視野を備えた研究者養成を目的に、基幹研究プロジェクトに参画する若手研究者を海外の研究機関に派遣する「若手研究者海外派遣プログラム」を実施しています。

今回は、イギリスに派遣された国立民族学博物館（民博）の相島葉月准教授に、ご自身の研究活動や海外調査研究での印象的な出来事など、お話を伺いました。

### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）を事例として、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係性について研究しています。近年、新自由主義経済的な政策の広がりにより、学歴や所得のみで中流層と下流層を区別することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつあります。

このような背景を踏まえて、私は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考えています。エジプトをはじめとした中東諸国において、空手道は子どものお稽古事として大変な人気を博しています。若手研究者海外派遣プログラムでは、中東からイギリスに移住したムスリム（イスラーム教徒）やその子どもたちの空手道に対する取り組みに関して民族誌的調査をおこなって、中東のグローバル化について考えてみました。

### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

中東との最初の出会いは、高校二年生でカナダに一年間留学した際に仲良くなった、イラン人移民の女の子でした。彼女が語るイランの思い出について聞きながら、中東やイスラームについて興味を持ちました。当時はイランで話されているペルシャ語とアラビア語の違いも知らず、友人が書くアラビア文字の美しさに魅了され、大学では第二外国語としてアラビア語を選択しました。週に1コマの講義でしたが、アラビア語に触れることで中東の歴史と文化についての関心がさらに高まり、大学三年生の夏にエジプトの首都カイロにアラビア語の語学研修に出かけました。初めてのの中東は全てが新鮮で、一ヶ月の滞在はあっという間に過ぎました。エジプトでは「ナイル川の水を飲んだ者は、再びエジプトに戻る」と言いますが、その後中東イスラーム研究を志すに至り、定期的にエジプトに通っています。

### 今回、若手研究者海外派遣プログラムを利用してイギリスに渡航した目的は何でしたか？

若手研究者海外派遣プログラムでイギリスに渡航した目的は、ムスリム人口が集中するマンチェスター市内の空手教室で参与観察および聞き取り調査をおこなって、中東のグローバル化について考察することでした。私が現在進めている研究では、国境を越えた人と情報の移動をグローバル化の重要な指標ととらえ、イギリスで移民として暮らすアラブ系ムスリムの美的感覚と身体文化の解明を目指しました。

マンチェスターは多言語が飛び交う、とてもコスモポリタンなイギリス第二の大都市です。マンチェスター大学空手道部は、大学のある地域がムスリム居住区「カリーマイル」から徒歩圏内にあるせいか、子供の生徒はアラブ人が特に多く、アラブ諸国出身の成人男性も数人いるため、調査地として選定しました。

### イギリスに滞在して、最も記憶に残ったできごとは何でしたか？

マンチェスターの空手家コミュニティの調査を行う以前は、イギリス社会のマイノリティとして暮らすムスリムにとって、善き信徒でありかつ「一般市民」として暮らすことは多く困難をとまなうという前提がありました。しかし、今回の調査を通じて、空手道の稽古が価値観や社会階層の違いをこえた新しい社会的なつながりを創り出していることに気づきました。

たとえば、稽古納めの後に、道場の仲間と中華料理を食べに行きました。日本で中華料理は、大皿をいくつか注文して取り分けて食べます。一方イギリスでは、各自が自分の食べたい料理を頼みます。イスラームでは豚肉や酒類などの飲食が禁止されていますが、菜食主義やアレルギー体質などさまざまな理由で食事制限のある人がいるためです。同じものを食べないからと言って、会食の意義が失われる訳ではありませんでした。ハラールでない食材を避けるために野菜焼きそばを頼んだムスリムたちが、稽古仲間と歓談する様子が印象的でした。





五級に昇級した際に頂いた紫帯と空手パスポート

**外国でこれから調査研究しようとしている学生や若手研究者にアドバイスをお願いします。**

イスラームの預言者ムハンマドは、「知識を求めよ。果ては中国までも。」と弟子に諭したとされています。善き信徒として生きるために学びは不可欠であるという意味で、現代のムスリムが頻繁に引用する一文です。ムハンマドが生きた七世紀のアラビア半島と比べ、21世紀の日本に暮らす私たちはグローバルなモノや情報の流通をあたりまえと捉えています。グローバル化が進む今日においても、メディアを介して得られる外国の情報と、実際に外国に暮らす中で得られる知識には乖離があります。

私はアラビア語と英語を学び、さまざまな国に暮らすことで、予想していなかった出会いや発見が沢山ありました。住み慣れた街を離れると色々な不都合がありますが、海外調査を実施する機会がありましたら、ぜひチャレンジしてみてください。

[国立民族学博物館／総合研究大学文化科学研究科](#) 相島葉月准教授

オクスフォード大学大学院東洋学研究科博士課程修了。マンチェスター大学人文学部講師（現代イスラーム）を経て、2016年7月より現職。専門は社会人類学、現代イスラーム思想。エジプトの空手家コミュニティを事例とした都市中流層の社会階層観やモダニティに関する研究課題を遂行中。主な著書は [Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society](#)、「現代エジプトにおける公共文化とイスラーム—メディア、知識人そして社会」(IB Tauris, 2016)、「第3章イスラーム復興—西洋モデルに依存しないイスラーム的近代の試み」『[大学生・社会人のためのイスラーム講座](#)』小杉泰、黒田賢治、二ツ山達朗編（ナカニシヤ出版、2018、pp. 41-54）。



## Vol. 037 情報学から読み解く日本古典文学：はじまりは『源氏物語』

2019年3月からニューヨークのメトロポリタン美術館で、『源氏物語』の展覧会が始まりました。テーマは、『源氏物語』に触発された芸術で、11世紀から現在までに至る作品が展示される北米で初めての展覧会です。

『源氏物語』に触発されたのは、なにも芸術家だけではありません。『源氏物語』がきっかけで日本文学の道へと進み、今では、日本文学と情報学を組み合わせ、コンピュータがくずし字を認識するシステムの研究を行なっている若手研究者がいます。

その若手研究者である[人文学オープンデータ共同利用センター](#)のカラーヌワット・タリン特任研究員に『源氏物語』との出会いから現在の情報学を駆使した研究について伺いました。





## 『源氏物語』について研究しようと思ったきっかけは何ですか？

タイ語訳の『あさきゆめみし』（作者：大和和紀）に出会ったことです。私はもともと日本の文化、特に平安時代などの古い文化に興味があり、小学生の頃から日本語を習っていました。平安時代のことを知ろうとバンコクの図書館に行っても、当時は日本古典文学に関する本がほとんどありませんでした。そんなおりに出会ったのが漫画『源氏物語』です。

そして、文部科学省の国費外国人留学生の奨学金を得て、早稲田大学大学院へ進学することになり、日本に留学するという夢を叶えました。大学院でははじめから『源氏物語』を勉強するつもりでしたが、正直なところ、『源氏物語』の研究については何も知りませんでした。

## 『源氏物語』を研究するにはくずし字が読めなければなりません。現代の日本人で読める人がそれほどいないくずし字。どのように勉強しましたか？

修士の時にくずし字を読む授業があったのですが、全く読めなくてテストに落ちてしまいました。しかし、どうしても読めるようになりたかったので、少し変わった方法で勉強しました。くずし字が書ければ読めるようにもなるはずと考えて、書道教室に通い始めました。

実際、書きながら読もうとすると上達も早かったです。くずし字を書けるようになると、読むときに筆の入り方に注目するようになります。そうすると、書き方を意識してくずし字を読むようになり、こう書くからこう読める、という感覚が身につきます。



書道を初めてから3年ほどでかな書道四段に

## 大学院でどのような『源氏物語』の研究を行いましたか？

鎌倉時代から南北朝時代までの源氏学者が、『源氏物語』をどのように解釈したのかを研究しました。これは『源氏物語』の当時の注釈からわかります。注釈には、語彙の意味、和歌の意味、歴史など、さまざまな種類があります。これらの注釈の解説を通して、平安時代の文化に関する理解を深めました。



現在は人工知能分野の技術を用いて、コンピュータがくずし字を認識するシステムを開発しています。こういった経緯で情報学の勉強を始めましたか。

大学院在学中は、『源氏物語』の注釈の翻刻（ほんこく：くずし字を現代の文字に置き換えること）作業をずっとやっていました。翻刻作業は大変な作業で、本の分量が多いとなかなか終わりません。もしコンピュータを使って一部の作業を進められたら、研究時間をもっと有効に使えるのではないかと考えました。また博士論文を書いている時には、今読んでいる写本の内容を検索したいとも感じていました。しかし現存する文献の量に比べ、翻刻の担い手は圧倒的に少ないという問題があり、その問題を解決する翻刻システムを開発したいと思い、情報学の勉強を始めました。

開発した翻刻システムが『源氏物語』の冒頭を翻刻（赤字箇所）した結果

これまでもくずし字の自動認識の研究はなされていると思いますが、今回の翻刻システムは、これまでとどのように異なりますか？

文字認識の一般的な手法は、主に4段階あります。まず、資料をデジタル化し、次に画像中で、どこが背景、文字、絵の領域かというレイアウトを解析し、さらに文字領域を段落、行、文字などの要素に分割します。最後に、各文字が何の文字なのかを認識します。しかし、くずし字が続けて書かれることで、このような手法はくずし字にはうまく適用できないのです。

この問題を解決するために、私たちは分割を明示的に行わない手法を用いました。この手法はもともと生物医療の細胞画像解析のために提案されたものですが、古典籍で文字が重なったりする様子が、細胞が重なり合うのと類似しているのではないかという発想に基づいています。

実際にこの手法を適用してみると、従来の方法よりも高い精度でくずし字が認識できました。今後はこの翻刻システムを、誰でも使えるように公開したいと考えています。



コンピュータによってくずし字の翻刻が効率化されれば、研究者がその恩恵を受けるだけでなく、くずし字が読めない一般の人でも古典籍に触れやすくなるとカラーヌワット特任研究員は話します。

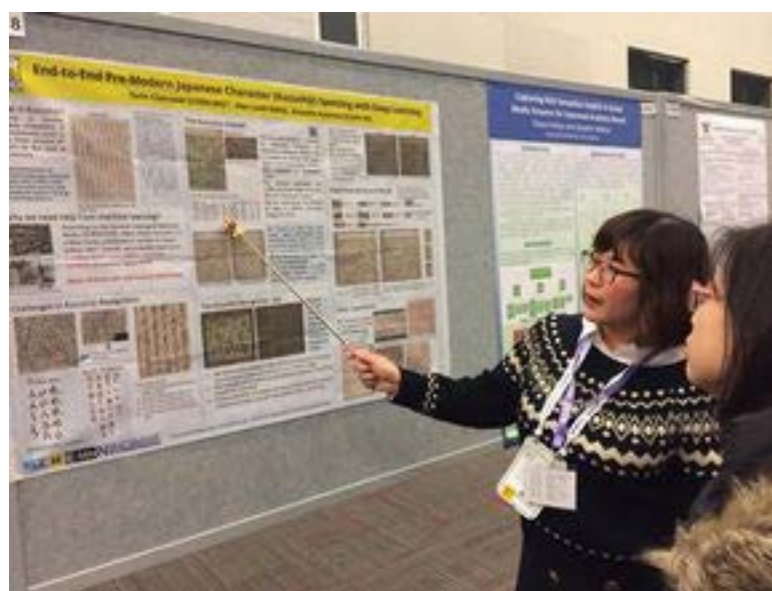
小さい頃から好きだった日本語とプログラミングが互いにぴたりとはまり、現在の研究につながっているカラーヌワット特任研究員。彼女の研究者としての物語は今後、どのように展開していくのでしょうか。

(聞き手：高祖歩美)

情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター [カラーヌワット・タリン特任研究員](#)

2018年3月に早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程日本語日本文学を修了。同年4月より現職。くずし字の自動認識の研究について、情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2018」最優秀論文賞を受賞。

Twitter:[@tkasasagi](#)







## Vol. 038 暮らしの映像から考える持続可能な未来

「環境問題」は科学の問題であるという印象を持っている人は多いかもしれません。しかし、環境的な課題をいわゆる「科学」の見地から捉えるのではなく、私たちの身の回りに、あるいは記憶のどこかにある風景から、持続可能な環境や社会のあり方について考えることもできます。そんな身近な風景やエピソードを通して環境問題について考えを巡らせるイベントを2019年の春に東京で企画しました。

題して、「のぞいてみよう！土・ミツバチ・食の世界～持続可能な社会をめざして」。2019年3月16日、東京お台場にある日本科学未来館（未来館）に総合地球環境学研究所（地球研）の研究者たちが出向き、映像上映・トークイベントを共催しました。陶芸やミツバチの飼育、ブータンの食事情について、それぞれ15分程度の映像作品を上映した後、研究者が映像の一部を取り上げながら解説するという形でした。



ここで上映した映像作品は、2018年のある時点に撮られた、普通の人々の日常を淡々と映した映像です。例えば、私が撮影・編集した「静かな大波」は、ブータン王国西部の農村に暮らす家族の1日を収めました。ある冬の日、朝早く起きた若夫婦が、ご両親と子供達がまだぐっすり眠っている隣でミルクティーを飲みます。体が温まったら、これから家族がいただくミルクティーやバター茶、チーズづくりに必要なミルクを得るため、雪道をぎゅっぎゅっと踏み固めながら牛小屋に向かいます。まず仔牛に母牛のミルクを飲ませますが、ある程度飲み終わったら仔牛を引き離し、乳搾りを始めます。仔牛に譲ってもらったミルクでおばあさんがゆっくりとつくったバターとチーズは、様々な料理に欠かせない材料になります。

ここまで観ると、微笑ましい自給自足の風景のように思えるかもしれません。しかし近年、急激な都市化やインドからの輸入への依存が高まり、変化が生じています。その一角を、この家族の台所でのぞき見ることができました。ブータンの代表的な料理であるケワダチ（じゃがいもとチーズの炒め物）をつくる際、自家製チーズとともにインドで輸入された製品であろうスライスチーズと一緒に入れるのです。「これを入れないとおいしくない」という感覚の変化が、ブータンの食農システムの変化を物語ります。

食の海外への依存度が増えると国内の食農システムに大きな変化が起きます。また、工場での大量生産による環境への負荷とそれに付随するゴミ問題も見逃せません。ブータンだけでなく世界的に進行しているこのような現象に、私たちはどう対処したらいいのでしょうか。ブータンの食農システムの研究者であり、「静かな大波」の共同監督である地球研の小林舞研究員は、これからの持続可能な食農システムのあり方について次のように話しました。「私たちの食べ物がどこから来たのか、食べ物の選択と消費が環境にどのような影響を与えるのかを想像し、自分の選択に責任をもつこと」だと。このような解説を交えながら、その多くが日本に住んでいる来場者のみなさんとともに、私たちの現状を振り返ってみました。

環境問題は、遠いところにあるものではなく、私たちの暮らしに深く関わるものです。今回上映した映像作品は暮らしの中の環境問題を浮き彫りにするものでした。さらに、研究者が映像を切り口に研究内容を語ることによって、些細なエピソードをより大きな文脈の中に位置付け、環境問題について深く考えることができました。このように環境問題を文化の問題として捉え直すきっかけを提供することは、人文学分野を牽引する人間文化研究機構に属している地球研のミッションであると同時に、これからの人文学に要求される役割の一つかもしれません。

総合地球環境学研究所・人文知コミュニケーター／特任助教 [金セツピョル](#)

韓国出身。総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了、文学博士(2016年)。専門分野は文化人類学、葬送儀礼研究、映像人類学。2017年より、現職。







人間文化研究機構（人文機構）では、2007年に英国の助成機関である、芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）と覚書を締結し、日本研究を志す英国の大学院生や若手研究者を本機構の研究機関で受入れて、研究指導を行っています。今回は、2018年度に京都の国際日本文化研究センター（日教研）で受け入れたクラウディア・デッラカーサさんに、ご自身の研究活動や外来研究員としてのご経験についてお話を伺いました。クラウディアさんは現在、英国のダラム大学の博士課程に在籍しています。

### 現在の研究課題や取り組んでいるプロジェクトはどのようなものですか？

私は、今イタリアの現代文学を、国境を超えた見地から分析しています。今日、文化的なつながりの重要性が増す中、そのような関係がイタリア人作家、イタロ・カルヴィーノに与えた影響について明らかにしようとしています。イタロ・カルヴィーノは、20世紀のイタリア人作家の中でも著名な作家のうちの一人です。

特に、1976年の日本訪問、日本文学と思想への興味、そしてカルヴィーノの後年の作品における日本文化についての詳述を研究しています。カルヴィーノの日本との接触は、実り豊かでありながらもこれまでほとんど探求されてきませんでした。ポスト・ウエスタン、ポスト・ヒューマンなカルヴィーノの論説について非常に興味深い事柄がわかってきました。

私は、修士課程まで言語学を学んでいました。ですから、現代のグローバルな文脈におけるイタリア文学の位置づけに照らして、テキストに書かれていることばの変遷を扱う文献学的なアプローチを用いて、より広い文脈でカルヴィーノのことばを理解しようと試みています。

### この研究分野に関心を持ったきっかけは何ですか？

ローマにあるカルヴィーノの図書館に所蔵されている本の目録を作成したことがきっかけです。この折に、日本の文学と宗教に関する書籍をいくつか発見するという貴重な経験をしました。目録の作成は、修士論文でカルヴィーノの小説“*Il barone rampante*”（『木のぼり男爵』）の言語構造を扱ったことに関係していました。カルヴィーノが執筆した散文に影響を与えたかもしれない18世紀の書物を特定するために目録を作ったのです。

博士課程の研究テーマは、長年勉強してきた大好きなイタリアの作家と、私とその魅力にますます惹きつけられて熱心に探求している文化、日本文化とを結び付けるものです。

### 5年後、そして10年後、あなたは何をしていると思いますか？

私は人生の今この時を謳歌しています。英国のダラム、日本の京都という素晴らしい場所で自分が一番好きな研究に取り組んでいます。ですから、博士号を取得した後に取り組む学術的であれ、個人的であれ、どんな研究であっても同じ情熱を持ち続けたいと思います。

実は、「無常」（常住でないこと）という考え方に魅了されているんです。ですから、未来というよりは、できるだけ今に注力したいという考えです。とはいえ、将来についてはもの凄く楽観的なんですけどね。

### 外来研究員として日本に滞在し、最も記憶に残った出来事は何でしたか？

たくさんの素晴らしい思い出があります。高野山や日光のようなわくわくする場所にも行きましたし、息をのむようなお寺や庭園も京都や東京で訪ねました。そして、親切な人々との出会いもあり、忘れることはないでしょう。

最も印象強い深い出来事の1つは、下北沢のパブで行った講演で、東京人文学プロジェクトが主催したものです。東京の中でも素敵な地域のひとつで開催されただけでなく、好奇心に満ちた国際的な参加者に私の研究をお話できる機会でした。的確な質問が投げかけられたことや自分の考えが文字通り学者以外の人々に伝わっているという感覚は得がたいものでした。何よりも参加者が、国境を越えた視点という私の研究の切り口に本当に興味を持っていてくれるようで嬉しかったです。

### 海外や異文化での研究を考えている学生・若手研究者にアドバイスをお願いします。

どんな恐れをも乗り越えて、荷物をまとめて、ただただ行くことだけをお勧めします。行き先は、遠ければ遠いほどいいと

思いますよ！ 外見が日本の大多数の人と違ったり、私自身の名前が全く通じなかったりして、全く異なる文化を体験したのは、初めてのことでした。もちろん、しんどい日もありました。落ち込む朝もあることを覚悟しておいた方がいいですね。

とはいっても、全体的に見て、今までの私の人生で最も貴重な経験でした。相手の立場に立って相手のアイデンティティを理解することの重要性を肌で実感しました。新しいアイデンティティや文化を体験することでしか、自分自身の中に他者を発見し他者の中に自己を発見できないと思うんです。このような考えは私自身の学術研究に関連するだけでなく、平和的な対話や文化的な出合いの必要性を忘れがちな地球市民としての生活にまさに必要です。



#### クラウディア・デッラカーサさん

クラウディア・デッラカーサさんは、[芸術・人文リサーチ・カウンスル \(AHRC\)](#) の奨学生として英国ダラム大学の博士課程 2 年生に在籍し、日本文化がイタリアの作家イタロ・カルヴィーノ (Italo Calvino) に与えた影響について調査研究を行なっています。クラウディアさんは、査読誌「[人文科学の MHRA ワーキングペーパー](#)」の大学院生編集者です。博士課程に進学する以前は、[ローマ・ラ・サピエンツァ大学](#) で現代文学の学士号と言語学の修士号を取得し、同大学の 'Laboratorio Calvino' の一員でもあります。

クラウディアさんは時間を見つけては、歴史的な街や自然保護区を旅したり、映画を見たり、読書を楽しんだりしています。彼女はスポーツも大好きで、イギリスの天気が許してくれる限りランニングに励んでいます！

Twitter:[@Cla\\_Dellacasa](#)



## Vol. 040 越境するマンガ — 大英博物館のマンガ展を契機に振り返る

国外で過去最大規模のマンガ展が 2019 年 5 月下旬から大英博物館で始まりました。

歴史も長く、格式の高い彼の大英博物館が、小説や演劇と比べると、やや軽いサブカルチャー的な「マンガ」という異国の文化について大規模な展示を開催。このことが日本やイギリスをはじめ、各所で反響を呼んでいます。

「マンガ」の影響は国境をまたぐだけではなく、ジャンルを超えて見られます。その一つが映画です。今回、英国のセインズベリー日本藝術研究所で映画研究を進めている北浦寛之フェローに、大英博物館のマンガ展を観覧した感想やレセプションに招待されて参加した感想、映画製作におけるマンガの影響などを伺いました。



**マンガ展をご覧になって、何が印象に残りましたか。**

展示の導入部と“The Art of Manga”というマンガの芸術的な側面に注目したコーナーが印象的でした。

会場に入るとイギリスの代表的な小説「不思議の国のアリス」(ルイス・キャロル作)のアリスのことは出迎えます。「絵や会話のない本なんて、なんの役にもたたないじゃないの」と。そして、アリスをモチーフにした日本のマンガ作品の展示が続きます。絵や会話のない本とは、ここでは小説などの伝統的なイギリスの活字文化のことです。イギリスのこれまでの活字文化から、絵や会話で成り立つ日本のマンガ文化へアリスを題材に橋渡しする、そんな日英を融合した導入部が印象に残りました。

また、“The Art of Manga”ではマンガは単に子ども向けの娯楽という見解に対して、芸術的な要素も認められるのではないかと主張しているように感じました。マンガについて、新しい視点を提供しようとする大英博物館側の意志が現れていたように思います。



大英博物館のマンガ展  
(会期：2019年5月23日～  
8月26日)の様子

**近年、マンガを原作とした日本の映画が増えているように思いますが、こういった変化の背景は何ですか。**

昔は、映画会社は自社のスタジオで、専属契約を結ぶ監督やスタッフ、俳優と共に単独で映画を作り、契約を結ぶ映画館に配給し、利益をあげていました。これを撮影所システムといいます。このシステムが、映画産業が低迷する70年代頃から機能しなくなります。

それと入れ替わって、出版社やテレビ局が映画製作に乗り出します。今はもう、多様な産業が映画製作に乗り出していて、そのひとつがマンガの出版社です。映画会社や出版社など複数の企業が共同で映画を作る「製作委員会」が商業映画では常態化しています。映画会社は人気のマンガを映画化して映画をヒットさせることを目論み、出版社は映画化されることで、マンガの販売につなげる思惑があります。このような流れが2000年代以降顕著になり、マンガを原作とした映画がグッと増えました。

**セインズベリー日本藝術研究所では、どのような研究に取り組まれていますか。**

映画やアニメが戦後、どのように世界に出ていったのかを調べています。たとえば、50年代後半から日本映画の国内市場が縮小し、映画会社は以前よりも海外に目を向けるようになります。イギリスの件でいうと、メジャーの一角である松竹は60年に、現地の配給会社と契約を結んで、イギリスの映画市場の開拓を図りました。

**日本のアニメや映画の世界的な流行は、クールジャパン戦略など、ここ10年ほどの取り組みの中で実った成果と考えていましたが、そうではないのでしょうか。**



そうですね。日本のアニメや映画の世界的な展開は、もっと前からあったという視点は重要だと考えています。もちろん、クールジャパン戦略のように政府主導で海外に目を向けようという意識はあるのも間違いありません。しかし、たとえば、東映動画（現・東映アニメーション）という、手塚治虫や宮崎駿とゆかりのある大手映画会社である東映の子会社は、1956年に設立され、以後、アニメ（動画）の輸出が大きなミッションになりました。

ですから、日本のアニメや映画の現状を分析するうえで、歴史的な背景を紐解いていくことは欠かせません。日本のアニメや映画の世界的な展開について理解を深めようと、今ちょうどイギリスや日本の研究者と議論するワークショップを企画しているところです（インタビュー時、7月に開催済み）。



2019年7月に開催したワークショップ「Historical Perspectives on the Distribution and Adaptation of Japanese Live Action Films and Anime Overseas（日本の実写映画とアニメの海外配給とアダプテーション（翻案）に関する歴史的視点）」の様子



マンガ展のレセプションではピカチュウの着ぐるみが出迎えてくれたと話す北浦フェロー。こうしたキャラクターの存在が、マンガが国境を越えたり、メディアを超えてアニメや映画の原作として利用されたりする上で重要な役割を果たしていると考えています。

日本を飛び出して、イギリスという異文化で映画研究を進める北浦フェロー。国境の次は、どんな境界を越えて、映画やアニメ研究にのぞむのでしょうか。

（聞き手：高祖歩美）



#### セインズベリー日本藝術研究所 北浦寛之フェロー

専門は、映画・メディア学。2013年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。国際日本文化研究センター助教を経て、2018年より現職。代表的な著作に「テレビ成長期の日本映画－メディア間交渉のなかのドラマ」（名古屋大学出版会、2018年）。現在、京都新聞で「英国の“小京都”から：ノリッジの日本研究と周辺」を連載中。



大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構